
この世界で引き金を引いた

コニ・タン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

この世界で引き金を引いた

【Nコード】

N8168C

【作者名】

コニ・タン

【あらすじ】

くすみません、連載停止中です>恋愛小説を一度も書いた事の無い素人が贈る、10話以内予定の中編ラブコメ？小説。情報泥棒兼高校生の吉田隆也と、その同級生、水野華の恋愛？話を書くつもりです。

プロローグ（前書き）

ジャンルが思いつかないので「学園」にしましたがあんまり学園じやなかったりします、ご了承ください。

ブローグ

「おい！居たか！？」

「いや、もしかしてもう屋外へ……」

「そんなはずは無い！よく探せ！」

お勤めご苦労さん、でもあんたらの探し方、全然荒すぎるよ。
柱の影の俺一人見つけれないなんて警備員として失格だ。
ま、それなりに気配も消してんだけどさ。

「くそっ！どこだ？」

「もうこの区画には居ないんじゃないのか？」

「むう……、3階に行ってみるとするか……」

はい、俺の勝ち。

賞品は要らないよ、もう貰ってるから。
じゃ、さよなら〜。

「終わったか」

さっきのビルから出た俺に、突然声がかかる。
まあ驚かない、こんな時にいきなり声かけるやつなんて一人しか居ない。

「へいへい、御所望の品はこちらにありますでございますよ〜っと」

「ならとつと貸せ、お前が持っていると危なっかしすぎる」

俺が持っているのはメモリーなんちゃらって言うなんか小さいやつ。機械のことはよく分からん、仕掛けたり回収したりは俺の仕事だが作ったり読んだりはいいつの仕事だ。

「こいつ」、「お前」、これが目の前の人物と俺の呼び名、仕事以外でこいつに会うわけでもないし、仕事の時は俺とこいつの二人つきりになる、名称は必要なかった。

「今回は家で仕事をするからお前も帰っていいぞ」

「家でするほどするほどでけえ仕事やまかよ？」

「いや、ただの気分だが」

心底不思議そうに俺の顔を覗き込む、「そんなことに理由は要るのか？」と。

もちろん要らないさ、俺が規律に厳しい現在社会に毒されてるだけです。

「じゃあ、まあ、帰ることにするか」

「早く帰って早く寝る事をオススメするよ」

こんな夜遅くに呼び出しているのは自分なのにシレっと言いやがる。これ以上居ても不快な気分になるだけなので俺は帰路につく。

夜風が少し、身に染みた。

1話

「りゅーや、りゅーや、りゅーやあ」

うるさい、耳元で喋るな、勝手に誰の迷惑にもならない所に行きやがれ、あの世とか。

パンが詰まった口では喋れないので、せめて心で罵倒しておく。

俺の名前は吉田^{よしだ}隆也^{りゅうや}、基本的にごく一般的な男子高校生だ。
んで、こっちが水野^{みずの}華^{はな}、基本的にごく変態的な女子高校生だ。

「あ、失礼な事考えた」

「ふあんふあえふえふあい（かんがえてない）」

「え、愛してる？やだなあ昼間っからあ」

こいつの耳はどうなっているのか、宇宙の真理なんかより俄然知りたい。

「だ・れ・が！んな事いうか！とっとと自分の席に戻って食え！」

今はくだらない授業と退屈な授業の間に設けられた至福の昼食タイム、こいつなんか邪魔されていいはずが無い、断じて、決して、何があるうと。

「いやいや、自分の席に戻るのはいいいのですがね、ちょつとおごってちょうだいな」

来た、来たよ、いつものパターンが！

「いや、俺今日、金あんま・・・」「皆様、隆也は財布に札た・・・」「うわっ、馬鹿やめろ！」

「おごって」

「・・・うん」

俺はこいつに弱みを握られている。

というのもまず俺の副業から紹介しなければならない。

昼は普通の学生、そして夜の俺の姿は！なんと泥棒なのだ！

・・・うん、かつこ悪いよね、スパイとかの方がよかった？

とりあえず１年ほど前「あいつ」からメールが着て、「儲かる仕事、欲しいですか？」と来たもんだ。

詐欺っぽかったけどその時は本気で金に困ってたからなあ・・・その仕事というのが偉いさんやどっかの社長の「弱味」を「盗む」というものだ。

盗聴やら隠し撮りとかそういうこととして、売ったり脅したりして金を稼ぐらしい。

駄目な仕事だよな？俺もそう思う、青い服着た正義の公務員に見つかったら即収容だ。

でもまあ、流されやすいのが俺の性分です。

しかも俺にはこの犯罪じみた仕事が入っているらしい、1年間誰にも見つからず仕事をしてきた訳だし「あいつ」も善良にやってる分は盗らない。

「不正に得た金」しか盗らないのだ、何の理念か知らないがそれのおかげで罪悪感も半減だ。

で、話を戻そう。

初めての仕事の時、正確な金額は言わないが「かなり」の大金が報酬として手に入った。

それだけあれば卒業まで慎ましく暮らせるのだが、そこは悲しいかな貧乏学生。

ちよつとね、大量にね、お金を使っちゃったわけですよ。

それを水野に見られてたかられているのだ、おごらないとみんなにばらされる。

うちのクラスの連中は強欲・散財・遠慮無しと有名で、俺が金持ってる事を知れば多分、臓器も残らない見事の使いっぷりを披露してくれるだろう。

弱味泥棒が弱み握られてどうすんだ、って思うけど仕方ないものは仕方ない、

かくして、俺はこの少女にたかられて過ごしているのだった…

「いや、ヤキソバパン考えた奴はすごいですなー、これ当時はゲテモノの部類だよ、多分」

「お前の一存でヤキソバパンをゲテモノにするな。和食とジュースの組み合わせの方が胸悪くなるわ」

学食で白米＋味噌汁＋焼き魚の黄金コンビ、「A定食」とオレンジジュースをおごらせるこいつに失望した。
さらに言うとなんのヤキソバパンを横取りしてゲテモノ呼ばわりするこいつに絶望した。

「怒るな、少年！報酬として明日はデートして差し上げよう！」

「うつわーい」

「オイこら、何だその嫌悪と投げやりな喜びを足して2で割ったよ
うな返事は？」

「的確に的を射てるな、その通りだ」

「死ね！」

箸を俺に向かって突き刺そうとする水野、そしてそれを容易く避ける俺、伊達に修羅場はくぐってないぜ。
と思っていたらそれはフェイクで本命は脛蹴り！
完全に意識が上に向いていた俺は机の下の攻撃に反応できず、クリンヒット。

「ぐ……おお……！」

脛を押さえてうずくまる俺、余談だがこいつは陸上部員だ、脚力が半端じゃねえ……

「はん！私の誘いを断るなど2年早いわ！」

「くそっ……！卒業まででめえのいいなりか……！」

俺が恨めしげに見つめると謝罪0%の瞳で見つめる水野。

周囲はそれを見て「また夫婦漫才か」とか言って去っていく、ちょっと待てどっちかと言うと「鎖を放さない飼い主と飼い犬」って感じだぞ。

……悔しいが俺は飼い犬で、繰り返し言うが悔しいし失言だ、頭の中に自分が「飼われている」イメージがあったのが嫌で、かぶりを振り忘れようとする俺。

さらにそれを見て思いつきり見下げながら爆笑する水野、てめえのせいだコンチクショー！。

まあ、こんな感じに、俺の学園生活は平和だった。

1 話（後書き）

一応本格的に始めましたがなんだかラブコメになっていない気が・
・

とりあえずまともなものが書けるように頑張ります。

2話（前書き）

モチベ下がらないうちに連続投稿です。

2話

「ったく！ 二日連続で仕事ってどういうことだよ！」

もはや見慣れた相棒に抗議する、いつも仕事は1週間は絶対空けるはずだ。

「儲けの良さそうな所が良いタイミングだったんだ、報酬は弾むぞ？」

「ぐ……………」

水野のせいで俺、金欠。結局こいつからも言いなりかよ…………

「5割増し、いや2倍は払えよ……………」

俺が言っと、こいつはにこやかに指を3本立てた。

美味しい話には裏がある、予想以上に面倒くさい仕事なんだろうなあ……………

結論から言わせてもらっと、ものすごい辛かった。

警備員の数がいつもの2倍はいるし、防犯設備もほぼ完璧。

俺の武勇伝で大作スパイアクション映画が作れそうだがそれは別の話として

「はあゝ、終わったぞ〜」

体がだるい、睡眠を求めて唸っている。

俺みたいに「仕掛ける」だけで物は盗らないから出来たが、普通の泥棒さんなら絶対無理だろう。

弱味泥棒の利点その1、何も盗らないから多少痕跡を残しても「不思議」ってだけで終わる、

その2、物は盗らないからいくらでも身軽に動ける、

その3、正確に「何かありそうな時」を狙うから盗聴器なども長く仕掛ける必要は無い、等等・・・

まあなにが言いたいかというと、今回は大分やばかったという事だ、本当にギリギリで高揚感を感じるぐらい。

「ご苦労様だ、前の報酬」

こいつは俺をねぎらいながら、極厚封筒を投げて渡す。

報酬として明日はデートして差し上げよう！

受け取った瞬間、水野の言葉が頭をよぎる。

（明日は・・・ちょっと贅沢しようかな）

ガラにも無くそんなことを思っ、俺は帰宅した。

俺は待っている、ひたすら待っている、この駅前で、人が多くて疲れる位置で、ずっと！

「やほーいー!」

「遅い！今何時だと思ってる！そして待ち合わせは何時だと思ってる！」

「待ち合わせは午後1時、現時刻は2時半であります、少佐！」

「わかってんなら早よ来い、大ボケ二等兵が！……ってあれ、他のやつらは？」

いつもは水野の周りに2、3人くっついていいるのだが、今日は一人だけのようだ。

「ちーちゃんも天崎も今日に限って予定入ってるデスヨ、残念残念」名前を出されてもさっぱり分らないが、肩をすくめた水野に同意の頷きを返しておく。

「で、どこ行く？」

どこに行っても俺がおごられるだけなのだが。

「うーん、とりあえず！昼飯ー！」

食ってなかったのか今2時だぞ、とか言う事は言わないでおく、どうせ^{ただ}無料で済ませたかったただけだ。

ひよい、ぱく、もぐもぐ、ひよい、ぱく、もぐもぐ、ひよい……

・・・

「・・・・・・・・何か喋りなよ」

俺たちは昼食をハンバーガーショップでとることにした。

水野様がファーストフード店では破格の値段となる物と量をお頼みになりましたのでワタクシメはおとなくフライドポテトで過ごしている次第であります。

ひよい、ぱく、もぐもぐ、ひよい、ぱく、もぐもぐ、ひよい・・・

無言の抵抗というやつだ、少佐と二等兵の立場は逆転したが、地味な方法で弱者の恐怖を思い知らせてやるわフハハハハ。

「・・・・・・・・何か喋ってよお」

水野の目が「命令」から「懇願」に変化、ちよつとドキリ。

水野は、外見だけならかなり可愛い。

目つきはきつめだがOK、全体的に見ると調和が取れてる。

体つきを見るとウエストは細く！胸は・・・

「何見てんの？」

すいません、割愛。

綺麗な髪は肩にかかる程度のセミロング、俺としては直球好みだ。

正直に言おう、こうなる前は「俺の校内付き合いたい女子ランキング」でトップ3だった。

だからまあ……二人きりは少しばかり嬉しいわけで……。ちよつとただだよ！？それも外見的に！客観的に見てね、他人から見るとどう見えるかとか……

「てい！」

「ぐぎゃあー！」

俺の思考は、水野の伝家の宝刀、脛キックにより中断させられた。

「何すんだこの野郎！」

「ずっと黙ってるからでしょ！あと私「野郎」じゃないわよ！」

「はいはい、細かいね！」「何すんだこのアマ」、はいこれでいいですかお嬢様！」

ギヤアギヤア喚く俺たちは最早この店では名物のようなものだ、常連の客は生暖かい目でこちらを見つめている。

「じゃあお前は……………」

「弱み握られてるくせに……………」

俺たちの口論は続く、客も黙って見守り続ける。そんな日常が、穏やかな日常が、俺達を包んでいた。

この時、俺は気付くべきだった。

穏やかな日常を切り裂く一角に、生暖かい中の一つの冷たい視線に。
でも俺は仕事中以外は普通の高校生で、水野は普通の女子高生だっ
た。

だから・・・迫り来るものに全然気付けなかったんだ。

3話（前書き）

主人公の一人称だけは初めてなので難しいです・・・

3話

現在5時48分、おそらく最後と思われる買い物が終わった。
というか最後であってくれ、俺の腕はそろそろ限界だ。

弱味泥棒なんてやってたら筋力がつくと思うだろうがそんなことは全然無く、身についたのはコソコソ隠れる方法だけである。

筋肉とか鍛えたいんなら真面目に部活することをオススメするね、俺は。

「やほ〜！終了〜！」

どさりとさり、そんな擬音がベストマッチな感じに俺の腕に荷物が載せられる。

この擬音からも分かるだろうが、俺の腕はとくに容量を超えていて、荷物の上に荷物の三段重ね、今年の鏡餅は俺ですか？

「み・・・水野・・・頼む・・・3分の1・・・いやせめて5分の1・・・」

「持てる男は辛いねえ」

「もてるが・・・違う・・・」

「アハハ！ そーんな隆也が大好きです」

不覚にもちよつとバランスを崩してしまった、冗談でもそんなことをいきなり言うのはやめて欲しい。

「むう、その程度の荷物でよろけるなんて荷物持ち大臣の名が泣く

ぞお？

それとも何？「大好き」で動揺した？私のこと好き？」

「そんな大臣になった覚えは無いし、好きでもない、毎日この扱いで好意をもてたら被虐嗜好としか思えん」

そんな俺は軽く被虐嗜好なのかもしれない、ニコニコしてる水野を見るとこの扱いも納得してしまっている。

「好きじゃないと？この才色兼備文武両道完璧超人の私に一片の好意も持たないと？」

「才色兼備と武道は認める、でもそれは性格に触れてないし前回のテストだって……………」

「ぐばあ！」

最早定番の脛キック、武蔵坊弁慶さんの気持ち理解できるぜ。

荷物を持っているのでうずくまる事もできずにその場で立ち竦む俺、それを見てけらけら笑う水野。

「あ、「才色は認める」って事はもしかして顔とかタイプ？」

「目の前に落ちてたら拾うぐらいにはな、ていうかそんなこと聞くな」

「にへへえ」

笑うな、本格的に惚れたらどうしてくれる。

「おーい、いちゃついてる暇があったら速くこーい！」

遠くから声が聞こえた、あれは

「やつほー、オカン」

「母上様、もしくはマミーと呼びなさい」

「包帯男のマミー」

やり取りの後、水野が水野（母）に腕を捻られていた、あれが母親ならあの娘も納得できるなあ。

「む、吉田君。何か失礼な事考えてなかった？」

「いえいえ、全然まったくこれっぽっちも」

くそ、感知能力まで母親譲りか。

「まあ、荷物載せなさい」

水野（母）は毎回荷物を取りに車でここまで来てくれるのだ、さすがにこれを持ったまま電車には乗れないし第一俺の腕がもたん、干切れる。

俺たちも車に乗って帰ればいいと思うのが普通だろうが、どこでも峠の走り屋レベルのドライビングテクを見せてくるので、とても怖い、現に一回死にかけた。

「ぶはあゝ・・・」

「あつははは、おっさん！」

荷物を降ろした俺を指差して再び水野が笑う、だからてめえのせいだつて言つてんだろコンチクショウ。笑いながら水野は車に　　つてあれ？

「お！うれしいねえ、華。今日は乗つてつてくれるのかい」

「今日は言い争い長くて疲れちゃつてね、頼みますわ、母上様！」

「おい、俺は　　」

「隆也は電車でいいよん。あ、はいこれ」

水野は車に乗り込む瞬間、俺の手に紙を握らせた。開くと中には走り書きでこう書かれてある。

『明日もデート！学校終わってから！』

「・・・・・・あー、嵌められたー・・・・・・」

夜の厄介事も昼の厄介事も二日連続が続く日ですこと、今回は金の心配ないんだけどさ。

でもまあ、それよりもお誘いがあつて嬉しいと思つてしまつた方が厄介だ。

あいつが変な事言つせいだと、自分に納得させて帰路に着いた。

「で、何だ。俺はお前の機嫌でも損ねたか？それともまた気分か？」

現時刻は午後11時半、ギリギリ日付の変わっていないという時間まで、1時間も振り回したのは「こいつ」だ。

「仕方ない事だ。ま、話すからあがれ」

今日のデート、もとい荷物持ちから帰った俺の携帯に着信アリ。それはもちろんこいつからで内容は

『いつもの場所、いつもの時間、ベンチの下』

と書かれていて、公園に行くとベンチの下に置き紙があったというわけだ。

それから俺はRPGよろしくヒントを参考に町内を駆けずり回って、そして今、とっても大きいマンションの前につつ立っている。とりあえず、ご好意に甘えてマンションに入った。

隆也innマンション最上階。

やべえよ、このマンション自体高そうだけどしかも最上階！？こいついつも俺との取り分どうしてるんだ！？

「まあ、座れ」

うろたえている俺をよそ目に着席を勧めてくるこいつ。

さて、ここで吉田 隆也の内装解説のお時間です。

んー、何か警察に見つかるに危なそうな物や雑貨、機械類で足の踏み場がありませんねー、ソファーもベッドも、椅子一つありません！

はい、アホクサイ説明終了、結論としてはどこにも座れません。

「ん？ どうした、早く座れ」

こいつは散乱していた物を手早くどかして座る、それ適当に扱っていいのかよ・・・。

とはいえ俺も倣^{なら}う、ずっと立っているなんて冗談じゃない。

「で、何の用？正直仕事以外じゃ会いたくないんだけど」

「ああ、とりあえず食らえ」

ガンツ、と小気味良い音がした、俺の頭がスパナで叩かれた音だ。

「いってえ！何すんだコンチクショー」

「お仕置きだ、仕事失敗のな」

「はあ？ ちゃんと仕掛けてきただろうが！？」

「馬鹿か、お前は。見つかる所に「置いて」来たら何の意味も無いんだよ」

つまり、盗聴器とカメラが見つかったってことか。

「まあ、気に病むな。失敗は誰にでもあるさ」

「ごそつ、ゴン、ズサ

こいつが俺のポケットを探って何か硬いものを投入した、なかなか重い。

触覚で確認する、大まかに言つとVの字型だ。

多分味覚でも嗅覚でも分らないので視覚で確認する。

黒光りして引き金がある男なら一度は憧れるこれは

「拳銃!？」

「自衛隊の御用達だ、性能は保証する」

いやいや、そういう意味ではなくてですね、第一あなた様はこれをどこで手に入れてらっしゃるんですか!？」

「な、な、な、なんでこんな物!？」

「見つかったとなつては口封じに来る会社（とこ）もあるんだ、用心しろ」

『いつから日本はそこまで物騒になった』

文句を言いたいが言えない、俺はそのままの姿勢で1分近く固まっていた。

3 話（後書き）

「自衛隊御用達」とか書いておいて作者に軍事知識はほぼありません（笑）

これから妙な描写が出たりするかも知れませんがそのときはすいません。

4話

「はあゝ．．．」

深い、溜息。

溜息すると幸せが逃げる？元からねえよ、そんなもの。

「よっ、隆也」

「ぶはあゝ．．．」

「おいおい、無視するなよ」

さて、気さくな友人Aは無視することに決めて今日のことを考える。

この、腰の重い感触と共に。

しばらくは人目につかないところには絶対行くなよ、いいな？

頭には「あいつ」の言葉が木霊している。

幸い今は若者の楽園、学校であり不審者など入り込む余地は無い。

帰宅時も、それほど時間がずれなければ俺の家は人通りの多い地域だ。

借りているマンションは住宅地の近くにあるので睡眠時もおそらく大丈夫だろう、おそらく。

．．．いや、この冷たい現代社会、もしかすると隣で銃声が響いても無視決め込む人間が居るかも知れない。

「おい」

目の前で滂沱^{ぼった}と涙を流そうとしている友人Aに、今日始めて話しかける。

「おお！最早交友関係を切られたのかと思って本気で悲しんだじゃないか！」

「まだH^{ホーム}R^{ルーム}も始まってないだろうが。で、頼みたい事があるんだけど」

「おう！金と女と勉強と面倒くさい事と不利益な事以外は全部相談に乗るぞ！」

「今日泊めてくれ」

「ツッコミも無しかよ。それに俺ん家は無理だぜ」

「どうして？」

「母親がうるさいの嫌いだから」

こいつの母には一度だけ会ったことがある、ものすごく怖い、睨んだだけで子猫くらいなら殺せそうな女性だった。
やめておこう、命の危険を増やすような真似は。

「あー、やめとくわ。俺も命が惜しい」

「だろう？ 第一お前、彼女の家泊めてもらえば一挙解決じゃねえか」

ブッー！

吹いた、何も飲んでねえけど唾だけ吹いた。

「うつわ！ きちゃねえなあ、もお！ どうした、お前実は純情か！？」

「それ以前に彼女って誰だ！」

「は？ 水野に決まってるだろ？ あのくつつき加減はそうとしか・・・」

違う！ あれはおごらされているだけだ！、と叫びたかったがぐつと堪える。

こいつは数少ない良心の一人だが金持ちの噂が広まるとやばい、命の危険がさらに増える。

「水野とは・・・違うよ」

かろうじて、それだけ声を振り絞った。

でも、どうしてか心が痛んで

でも、どうしてか少し気分が悪くて

でも、どうしてか突き放された気分になって

「ほほお？ じゃあふられたか？ 可哀想な隆也には俺がカラオケに付き合ってやろうか？」

「ふられてねえよ、告白してねえんだから」

「じゃあ、好きであることは否定しない？」

「ンなわけ……………」

そこまで言って、自分でも思いがけず唇の動きが止まる。

「……………ねえ……………だろ……………」

かろうじて声を絞り出すが、それはとても不自然で、それはとても格好悪く止まってて。

前を見ると友人Aがニヤニヤしてこっちを見ていた。

「じゃ、告白はしてないだけ、って事でいいんだな？」

「いいわけあるか」

これは否定できた、でも

「嫌い」だという事を声に出す事が、こんなにも恐ろしいとは思わなかった。

「好き」だと言う事を声に出す事が、全然出来ない俺なのに。

ん、何考えてんだ、俺は。

どうして俺が好きなんていう必要があるんだ、あいつにとって俺はかねつる金蔓程度でしかないはずなのに、好意を告げても無駄……………

ってまた何考えてんだ、昨日あいつが変な事言うからこんな事になるんだ。

「とにかく、俺は、あいつの事……………」

そこでまた止まってしまっ、唇が動かない。

「ま、そろそろ人も多くなってくるしこのぐらいで勘弁してやるよ」

遊んでやがったのか、野郎め。

いつか復讐してやる、今度にもからかってやる。

「はあゝ・・・・・・・・」

溜息が一つ増えた。

今日はあいつの顔を見て、平静を保てるか分らなかった。

一時限目、今日は水野遅いな、まあこんなのはよくあることだ。

二時限目、あつはつは、水野はお寝坊さんだなあ。

三時限目、もしかしてサボりかよ、ちよつと休憩時間に欠席理由調べてみようかな。

四時限目、学校に連絡してない？ あいつ、サボる時でも連絡入れるのに・・・

今日の授業中はこんなことばかり考えていた。

昼休憩、俺は一人ヤキソバパンをかじる。

（サボってないなら事故？ それでも病院から連絡くるよなあ、まだ寝てるとかか？ ……いくらなんでもそれは無いだろ）

いつも食べている物なのに、美味くない。

だから紛らわすために、考えることばかりを繰り返した。

考えて、考えて、考えて、考えて考えて考えて……

考えても無駄ということしか思いつけなかった、どうせ俺は文明の利器も使いこなせないただの馬鹿だよ。

馬鹿だから直接確かめないと納得いかないんだよ、本当に大馬鹿さ、笑うなら酸素ボンベ用意してからにしろ。

「どこ行くんだよ、隆也」

いつも通り陽気な声で、朝と同じ友人Aが教室を出ようとする俺に声をかけた。

「ちょっと早退、胸クソ悪い」

「へー、へー、先生様には俺がよろしく伝えておきますよ」

友人Aはそう言って、俺に近づいてきた。

「なんだよ？もう早退するって……」家にはいないぞ、確認したからな」

奴の手には携帯電話、表示された件名は『水野自宅』

「お前……！」

「ま、あいつとは同じ陸上部のよしみって奴だ、ケータイの方は知らないから後は自分で探せよ？」

「あ、ありがとう」

「いって事よ、俺達友達」

にこやかにそう言っ、拳を突き出してくる友人A。
軽く拳をあわせて教室から出る。

「じゃあ、後頼むわ。ジュン」

最後に渾名で呼んでやった、あいつは後ろで滂沱と涙を流している事だろうさ。

5話（前書き）

今回から日常離れた話になります、色々ツッコミどころはありますがそこは物語ということでは……

5話

俺は、走る。

どこに向かってなのか分からない、どこを探していいのか分からない。

ただ、探していないと落ち着かなかった、後ろからずっと急かされているような気分になる。

「ハア、はあ、はあ、はあ……」

商店街を探した、公園やゲーセン、食料品店まで探した。だが、どこにも居ない。

脇腹が痛い、肺が割れそうで最早、足に感覚は無い。それでもずっと走り続けた。

どうしてだか分からないけど、今日会わなければもう会えないような気がした。

だから、走り続けた。

気付けば俺は「あいつ」のマンションの前に立っていた。

「はあ、はあ、そうだ……あいつに頼めば……」

前に聞いた話によると、オートロックがどことかで入れないらしいので、携帯で連絡する。

『はい……俺だ!』

『ああ……そつちから連絡するなんて珍しいな、どうした？』

良かった、お互い名前を知らないので分からなかったらどうしようかと思っていた所だ、ってメールの存在忘れてた、俺の馬鹿。

「お前人脈広いんだろ？ 人探し頼めるか？」

『良いには良いが……誰だ？』

「同級生だ、不自然な欠席だったんでちょっと心配になって……」

『！……わかった、今から家に来い、ロックは開けておく』

そして俺は、再びあの危険な部屋へ立ち入った。

部屋に上がると今回は少しだけ片付いており、飲み物も出してくれた（水だが）。

「水野 華って名前だ、探せるか？」

俺が問うと、こいつは少し逡巡してから言った。

「そいつは……多分誘拐だ」

「はあ！？」

思わず目の前にあった水のコップを倒しそうになった。

「すまない……会社あいつちがそこまで下卑た連中だとは……」

「いやいやいや、待てよ……ここ日本だぜ……。そんなもん
お前警察とか……」

「すぎるような声で俺は言う。」

「金の便利さを、お前はどこまで知っている」

「……！でもさ、あいつさらわれる理由とか！」

「だから下卑た、と言っただろう。お前は警戒してる周りからって
ことだよ」

「なんだよ、それ!？」

「今度こそコップを倒した、床が濡れるがどうでもいい。」

「こういう事にはならないように気を配っていたが……すま
ん……」

「すまんってなんだよ!？ お前のせいなのかよ!？」

「見つかったのはお前だが、あの会社を選んでしまったのは俺だ、
すまん」

「くそっ!」

「手近に倒す物がないので床を叩く。」

「謝るんなら……手伝えよ……！ あいつを助けるの……手伝え！」

「助ける、か。よしっ、作戦立てるぞ」

少し冷静さを取り戻した俺は、勝手に冷蔵庫を空けて勝手に水をコップに注ぐ。

「身元は割れているようだが……目に付いたらやばい事をしたいんだろうな」

水を飲む、頭が冷えてくる。

「具体的には？」

「無料で情報を取り戻す、だったら良いが……最悪、口封じもありえる。いつもは渡すだけで信じるか妥協せざるを得ない状況だったが……今回は向こうが優先権を握っている」

「そうか……」

コップを台所へ戻す。

「一応銃器は一通り揃っているが……俺は専門じゃないしお前も素人だろう」

「ああ、正面から行っても「助ける」は無理ってことか。……
・取引、するしかないのか」

「助けなきゃ駄目だ、返すにしても殺すにしても手間は五分五分、50%に賭けて死にたいか？」

「じゃあ、何かあるのかよ？」

「正面からじゃなくて抜け道から行けばいい、俺も出来るだけ手を打つ」

「そっちだったら確率は？」

「五分五分、何があるか分からんからな。だがこっちなら二人とも大丈夫だ」

「……分かった」

コップを冷水で洗いながらいつもの仕事のように、自然体でやり取りする。

急速に頭が冷える。

これは自分の責任だ、だから自分が助け出さなければならない。

「警察関係は？」

「その場にいる可能性はまず無い、向こうも一応言い訳が欲しいからな。

後で捕まる事は気にしなくても大丈夫だ、きちんと根回しをしておく」

「ん、サンキュー」

「決行は今日の夜、それまでに出来る限りのことはやっておく。お

前は寝ててくれ」

「あいよ」

夜、走り回って消費した体力をそれまでに回復させなければなら
ない。

辺りに散らばった物をどけ、俺は眠りについた。

6話

服装確認、癖の無いただの黒Tシャツ、つまりは闇夜に溶け込み動きやすいって事。

下はこれも少し黒め、腰には借りている拳銃を下げている。

その他はピッキングツールなど一通り、役に立つかは分からないが軽いので邪魔にならない。

すこし短めの染めていない髪に、少し引きつった顔の男が鏡に映る。俺だ、正直緊張している。

頭は冷えているがどうしても体がついていかない。

「大丈夫か？」

「大丈夫だ！」

あいつに言われて、つい強く言い返してしまった。

いかんいかん、平常心を保つんだ。

ここはあいつの部屋、作戦会議後眠ってからおよそ3時間、現時刻9時。

闇も濃くなってきたしそろそろ時間だと思い、俺は着替えて忍び込む準備をしている。

「そつだ、一つ聞きたい事があったんだがな」

あいつが話しかけてくる、向こうも仕込みは終わったようだ。

「なんだ？」

聞きながら水を一杯。

「そいつはお前の恋人か？」

ブツ！

盛大に水を吹いた。

なんなんだ、みんなはそんなに俺と水野をくっつけたいのか？

「ゲホ、ゲホ！ どうして、そういう話になるんだよ！」

「どうしてと言われてもな、なんとなくだ」

「あいつは違うよ、俺の弱み握ってて、付き纏っていつつもおごらせる奴。」

俺に気なんて全然ないっての」

「へえ、でも弱み握ってるならさっさと金だけ盗ればいいんじゃないかな？俺たちみたいにな」

「・・・え？」

今まで考えてもいなかった事があいつの口から発せられる。

「付き纏うってことは一緒に居ても不快じゃないってことだろ。助けたら告白でもしてみるか？」

ニヤニヤ笑いながらこいつが言う。
そういえばそうだ、

どうしてあいつは俺に付き纏うのだろう？好意までとはいかなくて

も俺と一緒に居て楽しい？じゃあもしかしたらチャンスも
……ってまたか、どうしてちょっと前からこんな風になっ
てるんだ俺の頭は。

「俺がごめんだっつーの。あんなのと付き合ってたら金欠になっ
ていつか死ぬ」

「その割には今の言葉を聞いて嬉しそうだったが？」

「な、な……」

思考停止、思考停止。

「んなことねえよ！」

脳が正常に戻って、やっと言葉を発する。

「ははっ、まあ、からかいすぎた。すまん」

こいつもか、世の中の人間俺をからかう時だけ同じ脳みそになっ
てるんじゃないだろうか。

「まあでも、始めに何を言つかぐらい考えて置けよ」

「？」

「馬鹿か、お前は。へんな奴らに捕まって、それで助けに来たのが
いつもは尻に敷いてる男だぞ？ そりゃ驚くだろうさ」

「ごまかすにしても、教えるにしても、かあ」

ハア、と俺は溜息をつく。

そう言われればそうだ、助けられて事後処理が完全だとしても本人の記憶まではどうにもならない。

最悪の状況、トラウマになって家から出れなくなったりなどもあるかもしれないのだ。

そうならないために、かける言葉は選ばなければならない。

なんにしても、面倒くさい状況だという事だ。

もう一度服装を確認、良し。

「オイ、ここから良いんだな？」

『ああ、そこは手薄にしてある』

前に忍び込んだビルの裏口の一つに、俺はいる。

今はケータイで会話しているあいつは、どうやら警備の一部を買収したらしい。

交渉するときだろうが強行突破を選ぼうが、とりあえず捕まっていないほうが有利に進められると言うのが理由だ。

進入時に別の場所に居てくれるだけで、見つければ容赦はしない、という条件だから油断できないが。

『そろそろ切るぞ、声で気付かれてハイ終わり、なんて洒落にならない』

「ああ、じゃあな」

ピッ、と音が鳴り通話終了、そして電源も切る。
頭を冷やせ、四肢の動きを確認しろ、指の先まできちんと動くか、
よし、今からは「仕事」だ。

俺は、裏口の戸の鍵を軽く針金でいじり、開錠した。
そしてそのままするるように中へ、足跡など残さない。
こじ開けた後は分かるだろうが知った時は後の祭りだ。

腰の拳銃に一度触れ、最早慣れ親しんだ闇の中を歩いていった・・・

そこには意外すぎるほど簡単にたどり着けた。
社長室、その場所を一番たどり着き難くするとはどれだけ警戒して
いるか窺える。

その部屋を中心に転がされているのは

（水野・・・！）

知らずに奥歯を噛み締める。

ここから見た限りでは外傷などはまったく無いが、注射など色々な
傷害手段がある以上、安心できない。

さて、ここまでなら今すぐにも駆け出したいところだが、俺の説
明ではこの部屋にあるものが一つ、欠けている。

長身の、男。

おそらくはこの社長が雇った特殊な職業の人だろう。

警備員などには無い、一種の追い詰められた感じがある。

失敗してはならないと、失敗する状況を常に想定できる、プロの貫

禄だ。

あいつに見つかれば、俺はどうなるかわからない。

いや、俺みたいな一般高校生はすぐに組み伏せられるだろう。

それでもやらなくてはならない、交渉はどうしようもなくなった時の最後の手段だ。

一度水野の居る場所にたどり着ければ何とかなるかもしれない。

あいつらも人目に付く所までは追ってこれないだろう、たとえ今回は俺が犯罪者でもこっちは向こうの犯罪の証拠を持っているのだ、痛み分けにしてはこっちに分が勝ちすぎる。

そう考え、俺は気配を消して水野に近づきだした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8168c/>

この世界で引き金を引いた

2010年10月19日03時04分発行